

伏見城跡発掘調査現地説明会資料

1982年12月18日

- 1 遺跡名 伏見城跡
- 2 所在地 京都市伏見区桃山町伊賀40
- 3 調査面積 約1400m²
- 4 調査期間 1982年10月15日～現在継続中
- 5 調査主体 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
- 6 調査経過

今回の調査は、橘女子学園の本地への移転に関連して実施しているものである。本年3月、まず敷地全域の分布調査を行った。これによって、現地形で平担面をなす本調査地付近に試掘を行い、本調査地の西隣の平担面に遺構が存在することを確認した。この後、学園の校舎配置計画が整い、校舎予定地ののうち、現地形での平担面部分を対象として行うこととなったのが今回の発掘調査である。

I 区の遺構

大きく見て、新旧2時期の遺構がある。

A 期には、調査区中央に東西巾12mの堀があり、この北縁には堀から地上への通路が設けられている。この通路には、I区東北隅からII区西隅にかけてある高台部分の西を北上していく。また、堀の東からこの高台の南下にも通路状の整地がある。

B 期以前に、堀及びその北側の通路はほとんど埋められ、東西で比高差2.5mほどの窪地となっている。

B 期には、東北隅の高台が全体に一まわり大きくなり、その西及び南には、やはり通路と見られる整地があり、その南は、調査区南端で、II区にも続く段差となって落ちている。この段差上に柱礎が1基ある。窪地と変った元の堀の部分にも、大きくは3回（細かく見れば7回以上）の整地があり、掘立柱

の建物もあった。3 時期目には火災痕が顕著であった。

この窪地の西の調査区西半には、整地を伴う平坦面が 2 箇所ある。窪地の西に接して東西巾 9m の整地があり、その内に内側が焼けた土壇などもある。この平坦面のさらに西に東西巾 12m の平坦面がある。両平坦面上の建物等の存在については予想されるものの不明な点が多い。西側の平坦面の北には巾 1m で通路状の部分があり、この北には表面が焼け、灰のつまったごく浅い凹みが各所にある。

Ⅱ 区の調査

Ⅱ 区で検出した遺構群も新旧 2 時期に大別することができる。

A 期

東西巾 11m 余、深さ 4m 以上の SX 108（堀と考えられる遺構）がある。調査区内では、南北 12m ほど確認した。平面 Plan は多角形を呈し、北・東・西の肩部はほぼ垂直に落ちる。肩部には北西部に炭層が堆積しており、土師器、瓦類が多量に出土した。

堀の埋土は底部付近には暗灰色泥土層が 1m 以上堆積し、この層上部から遺構上面までは淡灰色、暗灰茶色系の泥砂が厚さ 5～10cm の互層となっているのが認められる。これらの層からはあまり遺物は出土しなかった。

SX 108 西端からⅠ区東部にかけて、東西 21m 程南北 10m の長方形を呈する遺構が認められる。南端は、巾 1m にわたって 25cm 程下がる段を呈し、南はまた約 80cm 程下がり石の抜き取り痕が認められる。

この遺構は、調査区の北端では少し平坦で高くなっており、南へ傾斜した巾 4m ほど平坦になっている。遺構の性格は不明である。この遺構の上面には整地層が 2 層認められ、その上面には径 1m ほどの礎石据え付け痕が 2 ヶ所あり、1 ヶ所は礎石が残存する。

Ⅰ区西北部で築地状遺構を東西 15 程確認する。この遺構には巾 1m の溝状遺構が伴う。

B 期

A 期の S X 108 がほぼ埋められ、北及び西側に窪地のようなものが造られる。S X 108 が廃絶した後は、上面で非常に薄い整地層が 5 層認められた。このうち下層面より径 40 cm 程の礎石 3 個を調査区の南端にて確認した。間隔は 1.4 m の等隔である。この建物遺構の北西部に径 1.4 m 前後の石組土壇を確認した。

調査区の東側では、A 期の築地状遺構が廃絶された後、築地状遺構の基壇を南側へ 1 m ほど拡張して掘立柱建物に作り替えている。柱穴は径 40 cm の不定形で深さも異なる。柱間間隔も 1.8 m ～ 2.2 m と一定でない。柱穴に重複が認められるため、建て替えが行われたと考えられる。建物の東端にて東西約 5 m 南北 2.5 m 程の張り出し部が付き、その東側で自然石が 3 個据えてあり段状を呈する。

建物遺構の南端では、巾 2 m 東西 7 m にわたって黄灰色砂の整地が確認できた。この整地層は、S X 108 廃絶後の整地層のように数層に及んでいない。この他柵列 1 条、瓦溜め、土壇、柱穴等がある。

遺物

今調査にて出土した遺物は、瓦、土器、鉄製品、銭貨などがあり、遺物整理箱 500 箱を越える。そのうち瓦類が圧倒的多数を占める。

瓦類は、軒丸瓦、軒平瓦、せん、鬼瓦、面戸瓦などがある。軒丸瓦は圧倒的に三ッ巴紋が多く、桐紋も少量ある。三ッ巴紋に金箔を張ったものもかなり認められる。

軒平瓦は、唐草紋が多数を占めるが花紋もある。このうち金箔のものがある。せんは、すべて桐紋でほとんどのものが金箔を張っている。

鬼瓦には、推定 70 cm 以上の桐紋の鬼板が 2 個体ほど出土する。面戸瓦はごく少量しか出土せず、金箔の桐紋である。

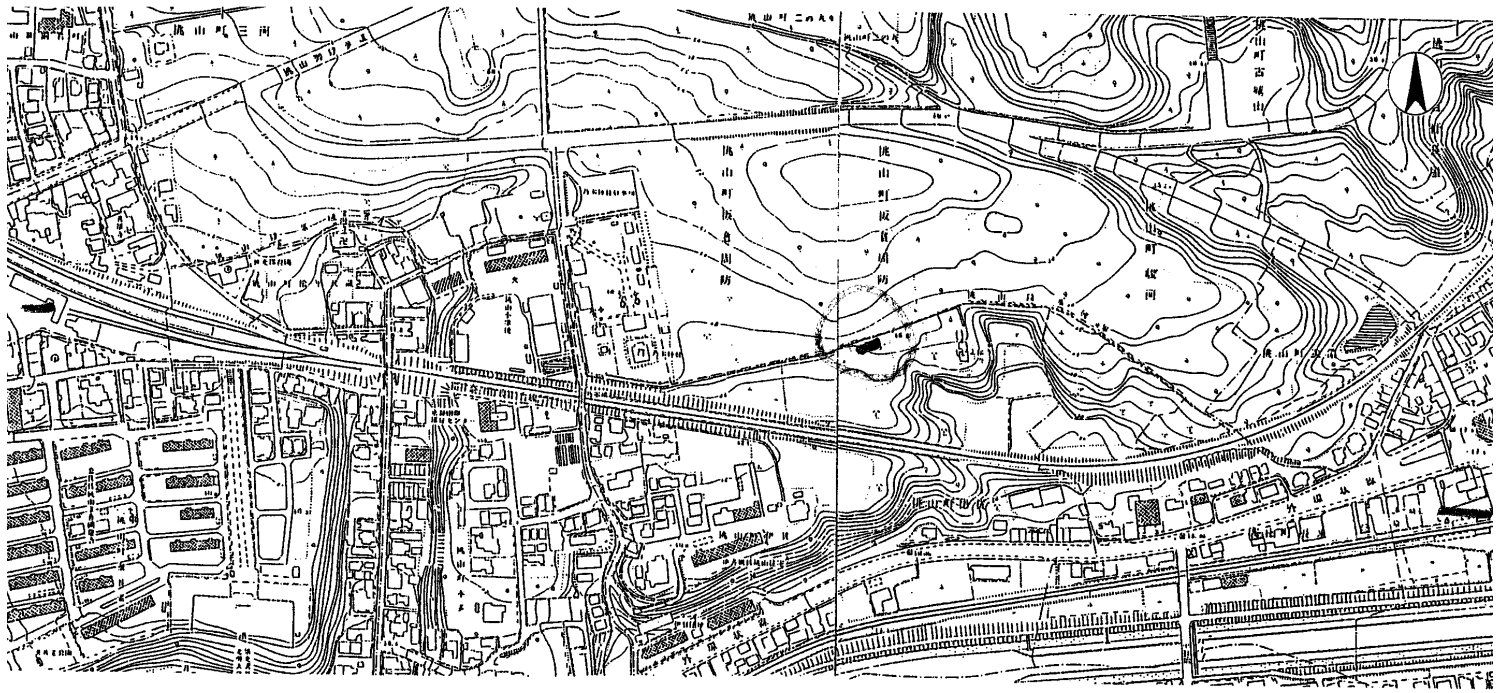
これらの瓦は、Ⅰ区整地 182、105、Ⅱ区 S X 108 炭層、西南部瓦溜めより比較的まとまって出土している。このうちⅠ区整地 182 より出土した瓦は、完形のものも多くかつ鬼瓦、面戸瓦などはほとんど出土しない。また

Ⅱ区西南部瓦溜めからは多量の軒瓦が出土している。

土器類は土師器が圧倒的に多く、国産陶磁器、輸入陶磁器、円筒埴輪片などがある。

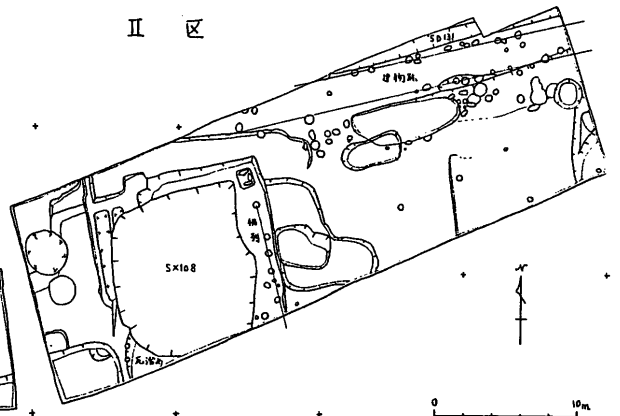
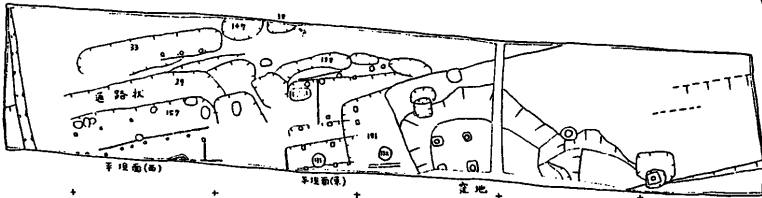
国産陶磁器は、備前、丹波、信楽のすり鉢、瀬戸、美濃の灰釉皿、椀、天目、唐津、志野、織部などがある。これらのうち、A期の遺構群からほとんど唐津、志野、織部は出土しない。

輸入陶磁器は、明の後半の染付け、赤絵、三釉、緑釉などがあり、染付けが大部分を占める。このうちⅡ区中央部より明初期唐草文獣耳壺片と考えられる青花が1点出土している。

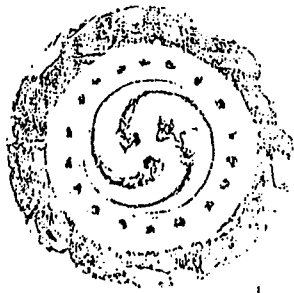


I 区

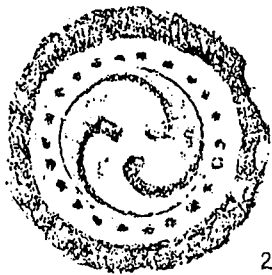
II 区



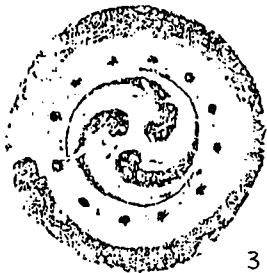
遺構配置圖



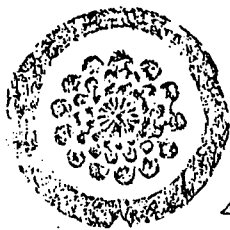
1



2



3



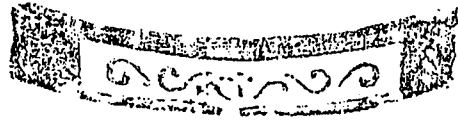
4



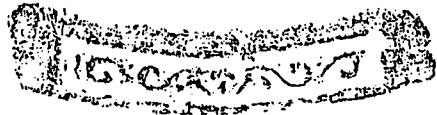
5



6



7



8



9



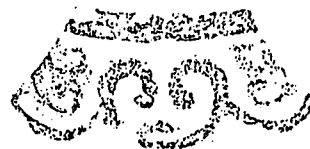
10



11



12



13

出土瓦及び植輪拓影 (4分の1)